

落語三百年

昭和の巻

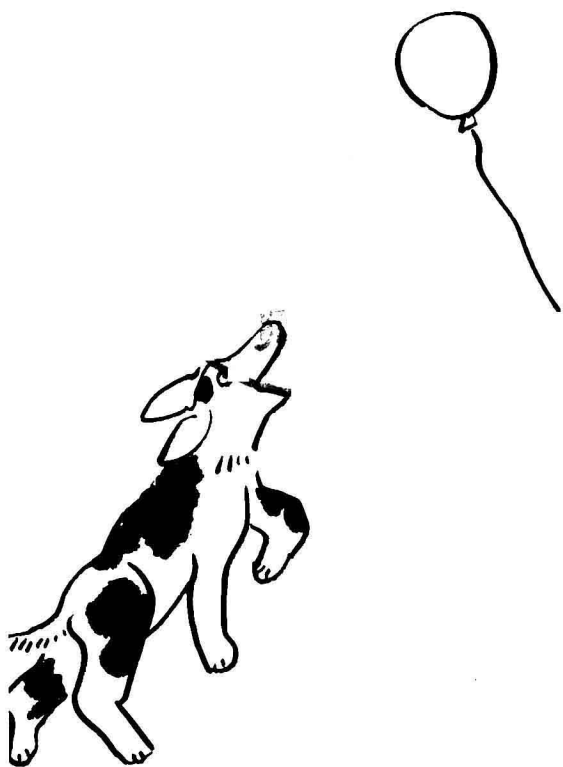
小島貞二編

毎日新聞社

語 三 百 年

昭 和 の 巻

小島貞二編



小島貞二（こじま ていじ）
旧制豊橋中学校卒。元出羽海部
屋力士。戦後東京日日新聞で相
撲，演芸記者を勤めたのちフリ
ーとなり演芸・相撲評論家とし
て活躍。現在日本放送作家協会，
東京作家協会会員。著書に「漫
才世相史」その他がある。

落語三百年

昭和の巻

昭和41年4月10日 印刷

昭和41年4月20日 発行

定価 380 円

編 者 小島貞二

発行者 赤木益一郎

印 刷 中央精版

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

〈換印省略〉

目次

戦争と落語

五

落語家の兵隊

三

ぶたれや

四

代書

五

かるた会

七

「締め込み」後日譚

八

猫と金魚

九

阿弥陀ヶ池

一〇

純情詩集

一三三

綴方狂室

一三六

鬼娘

一三八

お婆さん三代姿

一四六

なぞかけ

一五二

西遊記

一六〇

笠と赤い風車

一六三

あとがき

二〇四

さしえ

宮尾しげを

落語三百年

《昭和の巻》

戦争と落語

一

大正四年一月生まれの小林盛夫が、四代目柳家小さんの門を叩いたのは昭和八年六月である。「お前は栗のような顔してるな」というので、つけられた名前が栗之助。

その栗之助が現役で兵隊にとられて麻布三連隊に入營したのが十一年。その新兵早々に二・二六事件（昭和十一年二月二十六日に起こった帝都騒擾事件）が起こり、警視庁襲撃部隊にかり出された。その夜、叛乱軍が鉄道大臣の官邸を占領した折、上官のひとりが、

「小林二等兵、落語をやれッ！」

と命令した。そこでしぶしぶ、

「えー、一席、お笑いを申しあげます……」

と演ったのが「子ほめ」という与太郎もの。さすがに誰もクスリとも笑わなかったという。そりゃアそうだろう。血なまぐさい二・二六事件の裏の、かなしくもまたおかしい秘話である。

十四年満州で除隊、帰って小きんで「二ツ目」、十八年召集を喰って仏印（現在の北ベトナム地区）で終戦、ポツダム伍長となって二十一年五月に復員、二十二年に小三治で「真打ち」、二十五年に五代目小さんをついだ。つまり現在の柳家小さんである。

大正六年九月生まれの高水治男が、三遊亭金馬のところへ押しかけ弟子に入っただのは昭和十二年九月である。身体が小さくって目がわるい。見るからに破壊された顔の持ち主である。金馬は即座に金平の芸名と「アンマ」という綽名を与えた。陽気な芸で歌などもうまく、十九年の六月には「二ツ目」に出世して、同時に師匠の前名である歌笑をゆるされた。

いつまでも内弟子（当時金馬宅は四谷の内藤町）でもあるまいというので、金馬が仲人になって、上野の牛乳屋の娘との仲をとりのもった。その結婚式が七月（十九年）の暑さかり。

いつ空襲警報が来るかわからないときだけに、金馬宅の二階に仲間と近親者が集まって安直な披露宴を張った。新郎は半袖シャツ、新婦はモンベという戦時色。仲間の祝儀も三円から五円。第二の師匠の三遊亭円歌（故人）が二十円ふんばつした。金馬は東宝名人会専属のため、その弟子の歌笑も東宝以外出るところがない。そこで金馬とは兄弟弟子の円歌（落語協会）があずかり、あちこちの寄席に出る便宜をはかっていたのである。だから歌笑は二人の師匠をもっていたことになる。

それはそれとして運命は皮肉。その式の当日、歌笑のところへ赤紙が来ていて、翌日もう世田谷の部隊に入隊しなければならなかった。どう考えても兵隊のつとまる身体ではない。鉄砲の撃

ち方もわからないうちに、ひと月で帰された。そのかわり隊内ではもっぱら余興係で忙しかったという。

復員後、俄然芸の虫となり、好きなタバコもビタリやめ、収入は全部本につき込んで、小説から詩、漫画本から翻訳ものと片っぱしから乱読、ひところはせまいアパートの一室が本で埋まったほど。これが終戦とともににはなやかな歌笑ブームを生む下地となった。

昭和二十五年五月、銀座街頭でジープにはねられて死んだ、あの「爆笑王」三遊亭歌笑（先代）である。

古今亭志ん生（現）と三遊亭円生（現）は、昭和二十年五月、丸焼けの東京をあとに満州へ旅興行に出かけた。本当は志ん生と古今亭今輔（現）が行くことになっていたが、今輔は家が戦災に遭ったりして行けなくなり、かわりに円生が頼まれたものである。志ん生は、

「向こうへ行きゃア、まだ酒がなんぼでものめるそうだ」

というのでのり気になり、円生は、

「寄席はどんどん焼けちまって演るところはない。じっとしてりや徴用が来る。どうせすぐ帰って来られるんだ、行って来よう」

とみこしをあげた。契約は二ヵ月。給金もそうわるくないし、講談や漫才も加わって顔ぶれもにぎやかだ。このとき志ん生五十七歳、円生四十六歳。油ののりざかり。

関釜連絡船はもうとてもダメだということで、新潟から朝鮮の羅津（らしん）へ渡り、そこから汽車で新京

へ。全満を回って約束の二ヵ月が終わって、さア帰ろうよとなったがもう船はない。

やむなく放送局の仕事やら、二人会やらをやってチャンスを待つところへソ連の参戦。いのちからが大連まで逃げのびて終戦。

そしていよいよ明日はソ連兵が進駐してくるという前の晩、町内会の人たちが全部集まって別れの会をやるから、ぜひ内地の笑いをきかせてくれと頼まれた。大きな座敷に一ぱい人が集まったところで、町会長がおもむろに、明治天皇の写真額をおろし、声涙下る大演説のあと、みんなオイオイ泣く中でそれを焼きすてた。そうして二人に、

「さ、一つタップリと、皆さんを笑わして下さい」

といわれたときには、さすがの師匠もおどろいた。円生は「たらちめ」……例の八五郎のころへ嫁が来る。ことばがていねいで「自らことの姓名は、父はもと京都の産にして……」という笑いの多いおなじみの一席をはじめたが、普通ならどーっと笑うところで、みんなワアワア泣く。とても演れたものではない。あとの志ん生はなんにも演らずに下りてしまった。

「あんなやりにくかったことは、あとにもさきにもありやしません」（円生談）

叛乱軍の前で「子ほめ」を演った小さんと好一对といえるだろう。

結局、言語に絶する苦労のあけく、二十二年の一月に志ん生がまず帰り、約ひと月遅れて円生も帰って来た。「二人とも死んだらしい」という噂が流れていたときだけに、仲間うちはびっくり仰天、そして再会をよろこんだ。えらい旅があったものである。

二人は元気に帰国早々から寄席にカムバック、貴重な人生体験は芸の上にもプラスして、より一層の人氣と風格を増した。この満州時代の苦労話は、志ん生の場合「びんぼう自慢」（昭和三十九年四月・毎日新聞社刊）、円生の場合「寄席育ち」（昭和四十年三月・青蛙房刊）にくわしい。

志ん生の長男（本名美濃部清・昭和二年生まれ）は、志ん生が満州にゆくときは落語家になり立てだったが、帰って来たときにはもういっばしの若手として稼いでいた。現金原亭馬生である。また志ん生が旅立つ少し前に弟子入りした志ん治（本名松岡勤治・大正十五年生まれ）は、いつまでたっても師匠が帰らないので、ゆるしを得て今輔門下に転じて花輔と改名、メガネをかけたインテリの新作派として、戦後ちょっと売れた鶯春亭梅橋となった。いまは故人。

このような志ん生、円生の苦労も昔々亭桃太郎には及ばない。

桃太郎は柳家金語楼の実弟。東宝名人会の専属として売れに売れていた。どういうわけか、ときの東条首相にバカに氣に入られて、「君のはなしをきかないと、メシがうまくないよ」というので、一日おきに官邸まで出かけて「えー、一席……」とごきげんを伺っていた。それまでも皇軍慰問として華中、華南、華北あたりにもしばしばくり出して大活躍していた。そこへ赤紙がとび込んで来たわけだ。十八年八月のことである。

「これほどまでにお国につくしているのに、何も兵隊にまで引っぱり出すことはないでしょう」とかけ合ったが例外は許されず、甲府の連隊へ入った。ときに三十二歳。痔がわるく召集解除候補の中に入ったが、そこがまた運命のめぐり合わせ。というのはその入隊の前日、その甲府の

連隊のとなりの陸軍病院へ、最後の仕事で慰問に出かけて、

「えー、明日はあしたおとなりの方へ、一兵卒として参りますので、どうぞよろしく」

というようなあいさつをして拍手かっさいを浴びた。となりでは知っているから、「そんな便利な奴を帰すことはない」というわけで、とうとう残されてしまった。

そしてハルビンに行き、そこからソ連と国境を接する最前線の守備隊に配属された。そこへソ連の突入があり、守備隊の大半は戦死したが、桃太郎一等兵は不思議と傷一つ負わず底知れぬ密林にただ一人さまよい込んだ。孤独と飢えと寒さで何度も自殺しようとしたが、その都度落語を一席口ずさんで気をとり直したという。

「四日目あたりかな、密林の木が露スケに見えたりして、気がおかしくなった。そのとき『三人旅』って落語はなしがあるでしょう。あれをひとりできりかえすうちに、フーッとわれにかえたことを覚えてますよ」(桃太郎談)

十日目に満人の農民八人に見つかり、袋叩きに遭って、近くのソ連軍の占領地へ連行されて行く、これはどうしたとか、そこには日本軍……それもかつてハルビン時代の本隊が来ているではないか。おどりが上がつてよろこんで、

「へえ、あんなにたくさん露スケを捕虜にしたんですか」

と顔見知りの上官にきいたら、

「そうじゃアない。捕虜はこっちだ」

というようなひと幕があり、そこではじめて敗戦を知った。つまり武装解除された連隊がシベリアへ連行される途中、そこで小休止をした偶然のひとつにぶつかったのである。一緒にシベリアへ。そうして二十二年の十二月、いのちからがら復員して来た。

満五年のブランクはすごく大きい。それに体力、気力とも十分でなく、高座にカムバックするまでには、それからかなりの時間を要した。

いちばん桃太郎をおどろかせたのは、五年前名もない若僧であった歌笑が、いまや純情詩集とジャズ落語で、日の出の勢いになっていたことだ。いうなれば桃太郎とは同タイプ。彼の穴をねらったケースであったからだ。余談だが一方の歌笑も「桃太郎帰る」の報にはかなりあわてたようだ。当時仲のよかった私に、ひそかに、

「これはえらいことだ。どうしたらいいだろう」

と胸のうちを打ちあげたことがある。

「まあ、一度あいさつに行った方がいいだろう」

とアドバイスしたことを覚えている。戦前の桃太郎は歌笑にとって神さまみたいな存在であったのである。結局、歌笑の急死によって、二人は噛み合うことなく終わった。桃太郎の正式なカムバックはそれ以後になったからである。

敗戦を機に落語家になったケースも多い。

大正九年十月生まれの、武蔵野の古い農家のあととり息子秋本安雄は、百姓仕事が生に合わず

近くに出来た電機工場につとめ、工場の吹奏楽団に入つてトランペットを吹いているうちに入営、まじめによくつとめて軍曹にまで進んだ。

東シナ海の輸送船上で、空襲をうけて名譽の戦傷を受け、いわゆる傷痍軍人となつて終戦。その同じ隊の戦友に、春風亭柳橋の息子さん（渡辺勝郎氏）がおり、

「どうだい、一つ落語家^{はなしか}でもやらんかい」

「じゃア、そうしようか」

というようなことから、復員してすぐ柳橋門下となつて柳之助。はじめは古典ものに精出していたが、口調がどうも新作に向くというので、中途から新作派に転向して、軽妙なタツチのスタイルを打ち立てたのが、現春風亭柳昇である。テレビの「お笑いタッグ・マッチ」の司会でトランペットを吹くのは、少年時代の余技が身をたすけているわけだ。

七代目（先代）林家正蔵の長男として、大正十四年一月生まれの海老名栄三郎の場合は、軍隊時代から落語家の片りんを示した。父は実直なサラリーマンにしようと、私立大学の付属高校まで出したが、現役で千葉県の部隊に入隊した。

何せもう訓練より穴掘りの方が忙しい時代である。彼もせっせと防空壕を掘っているうちに、集合の号令がかかった。気がつくとも銃がない。どうやら土もろとも埋めてしまったらしい。

「銃はどうした？」

「はいッ、なくしたらしいであります」

「馬鹿もんツ、銃がなくて戦争が出来るカッ」

「出来ます」

「なにッ？ 銃を持たんで戦地に行く軍人があるとでもいうのかッ」

「あります」

「なにッ、ある？」

「はい、大將は鉄砲なんぞ持たないで、戦争いくさに行くであります」

次の瞬間、海老名二等兵の顔面はカボチャのようにデコボコになったという。

そのまま落語になるようなことはなしの主人公は、復員後の二十二年、父の稼業をついだ。現林家三平である。軍隊時代は通用しなかった「スイマセン」が、いまや彼の売りものとなったのである。

戦争は落語家たちに、このようなかなしい体験をさせた。軍隊経験をもつ人はまだまだ多い。誰の胸にも多かれ少なかれ、この種の思い出は残ることだろう。

二

それでは、東京にのこって銃後を守っていた落語家たちは、どうだったのか。

ここに門外不出の貴重な記録がある。

紙切り（紙工術）の名人林家正楽氏しょうらくは、ずうっと大正六年以来日記をつけている。浅草に住んで

いて、昭和二十年三月九日深更から十日未明にかけての東京大空襲により、家財もろともそれまでの日記帳……大正・昭和寄席日誌ともいべき資料を灰にした。

しかし、正楽氏はその日からまた、ありあわせの帳面に日記をつけはじめた。その第一頁に、「昭和二十年三月九日夜より十日朝にかけての敵機の爆撃のため、浅草区永住町一一四番地宅にて類焼。家具寝具全部及び数年来書き残しありし自作新作落語原稿百数十編焼失す」

とある。その二十年三月十日からその年一ぱいに及ぶ日記を、特別のはからいで借用、寄席に係のあるところだけをピックアップさせて頂くことをお許し願った。以下「内がそれである。

「三月十日。浅草、下谷、本所、深川被害甚大にて死者多し。貞山、岩てこ、李彩、扇遊、左喬、丸勝、武蔵太夫ら惨死す」

六代目一竜斎貞山は、講談組合の頭取で落語協会の会長であった。馬道に住み、言問橋まで逃げて煙にまかれて死んだ。六十八歳。死体は浅草の親分が見つけた。

太神楽の寿家岩てこは五十歳、中国奇術の吉慶堂李彩は六十八歳、パントマイムの立花家扇遊は六十歳。左喬は漫才師、丸勝は太神楽、武蔵太夫は新内語り。みんな浅草界限にいて、運命の火の粉をあびたのだ。

三遊亭円馬(現)は、扇遊と馬生(大阪から来た馬生)と菊屋橋にあった昭南荘というアパートで、となり合わせに住んでいた。そこへ三月九日夜の大空襲となり、扇遊夫婦がまっ先に逃げた。逃げ遅れた円馬は、アパートの住人であるご婦人連をリードして、比較的火の色のうすい上野方面